

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Classification of Verbs in Modern Tibetan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 慶治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004247

現代チベット語における動詞の分類

高 橋 慶 治*

A Classification of Verbs in Modern Tibetan

Yoshiharu TAKAHASHI

In this paper I will propose a classification of verbs in Modern Tibetan, according to the distribution of GIS Case Nouns. In an ergative language, transitive verbs require their agents to be in the ergative case, and intransitive verbs their subjects to be in the absolutive case. In Modern Tibetan, however, some transitive verbs don't require their agents to take the GIS Case Marker under certain conditions, while others always do. And some intransitive verbs allow their subjects to take the GIS Case Marker under certain conditions, while others always need to be in the Absolutive Case. These conditions are not difficult to specify; rather it's important to make clear which group each of the verbs belongs to. Tibetan verbs can be classified into four types according to the distribution of the GIS Case Noun. In addition, they can be classified in terms of volitionality, which is not marked on the verb. The classification by volitionality is secondary, but we have six types of Tibetan verbs divided in terms of the distribution of GIS Case Nouns and the volitionality of verbs.

* 日本学術振興会, 国立民族学博物館共同研究員

Key Words : Tibeto-Burman Languages, Modern Tibetan (Central Dialect), ergativity, classification of verbs, GIS Case Marker

キーワード : チベット・ビルマ系言語, 現代チベット語 (中央方言), 能格性, 動詞分類, GIS 格助詞

はじめに	2.2. GIS 格の主語を許さない自動詞
1. 絶対格の行為者を取りうる他動詞：意志的他動詞	2.3. まとめ
1.1. 動作動詞の絶対格行為者	3. 行為者（または経験者）名詞が必ず GIS 格助詞を取る動詞
1.2. 談話的な要因による GIS 格助詞の出現	3.1. 無意志的他動詞
1.3. まとめ	3.2. 相対動詞
2. 自動詞の主語：動作主格，対象主格	4. 結論
2.1. GIS 格の主語を許す自動詞	おわりに

はじめに

本稿は、現代チベット語（中央方言）の動詞を GIS¹⁾ 格名詞の分布に基づいて分類しようと試みるものである²⁾。動詞の分類については、長野 [1987b] などに、動詞の意味に基づく分類が示されているが、本稿では、チベット語の能格性について考え直す必要があるとの考えから、動詞が表す行為の主体（行為者など³⁾）が GIS 格になるか、絶対格になることができるかによって動詞を分類することを考える。つまり、GIS 格名詞の分布の仕方による動詞の分類を試みる。したがって、行為者や経験者が GIS 格か絶対格で表されない動詞については、考察の対象としない⁴⁾。

1) 略号

AV	助動詞	LA	LA 格助詞
CONJ	接続詞	NAS	NAS 格助詞
DANG	DANG 格助詞	NEG	否定辞
GI	GI 格助詞	NML	名詞化接辞
GIS	GIS 格助詞	PL	複数接辞
IMP	命令形	VBL	動詞化詞

- 2) 本稿は、国立民族学博物館共同研究（1992～93年度）「チベット・ビルマ系諸民族の言語文化」（代表者：長野泰彦）研究会での発表資料に手を加えたものである。また、1992年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。本稿の例文は、主として筆者が作例し、インフォーマントの大谷大学助教授ツルティム・ケサン氏がチェックを行ったチベット文である。資料としてあげた文献からの引用についても、ツルティム氏に確認した。ただし、ツルティム氏の判断と一致しないものについては注記してある。研究会において御意見を下さった共同研究会の諸先生とツルティム・ケサン氏に深甚の謝意を表す。
- 3) 他動詞における GIS 格名詞を「行為者（広い意味で経験者を含む）」、絶対格名詞を「被動者」、自動詞の絶対格名詞を「主語」と呼ぶことにする。このような用語法には、長野 [1987a: 817] に指摘があるように問題があるが、本稿ではこの用語法に従っておく。
- 4) 所有構文での所有者や、授受を表す動詞での受け手は LA 格助詞を取って、しかも、文の主語的な役割を果たすことがあるが、本稿では考察の対象としない。また、絶対格名詞を二つ要求する動詞もあるが、本稿では対象としない。

まず、チベット語の格助詞について略述しておきたい。チベット語の格には、絶対格、GIS 格、LA 格、NAS 格、LAS 格、DANG 格、GI 格などがある。絶対格は、名詞の引用形であり、格助詞が付加されない形式である。その他の格には、格助詞がある。GIS 格は、主として行為者を表す格である。LA 格は、およそ与格・位置格を表す。NAS 格・LAS 格は、奪格であるが、NAS 格が離脱・行為の起点、LAS 格が比較の対象を表す。DANG 格は、日本語の「と」にあたる共格であり、GI 格は属格を表す。これらの名称は、それぞれの格助詞の文語形を基にしている。文語において、GIS 格、LA 格、GI 格の格助詞には、付加される名詞の語末の形式によって異形態が存在する。本稿は、現代口語を基にした資料を扱っているが、すべての例文は文語形式であげているので、例えば、同じ GIS 格として逐語訳を付けている場合でも、実際の形式は異なっていることがある。

さて、現代チベット語の格助詞の用法の研究の多くは、能格助詞（筆者の用語では、GIS 格助詞）を扱っている。能格とは、自動詞の主語（S）と他動詞の被動者（P）を同じ格形式で、他動詞の行為者（A）を特別な格形式で表す言語において、その他動詞の行為者が取る格を言う。すなわち、形態上の格形式の点では、 $S=P \neq A$ という関係を持っていることになる。チベット語においては、自動詞の主語と他動詞の被動者が格助詞を持たない、名詞の引用形式である絶対格を取り、他動詞の行為者が、古典文法で具格助詞などと言われる GIS 格助詞を取る。このような格助詞の分布から、チベット語は、能格的な言語であると言われる。

言語類型論的には、能格型言語は、日本語のように他動詞の行為者と自動詞の主語を同一の格形式で表す対格型言語（ $S=A \neq P$ ）と対比される。しかし、主格・対格の対立は、行為者・経験者・被動者といった動詞と項の間の意味関係を抽象化して、統語関係を示すものであるのに対し、能格の生起は、動詞と項の意味関係を明示する点で意味レベルに関わり、構造的には形態レベルでの語形変化でしかない。能格型言語においても、統語的に見ると対格型言語と同様の現象を示すことが指摘されている⁵⁾。さらに、能格現象を他動詞について見る限り、それは意味関係を示すものと言えるが、自動詞は、主語の意味関係を反映するような格形態を取らない。1 項動詞である自動詞には区別すべき他の必須項がないからであり、意味関係を抽象化して一つの格形式（絶対格）で表すという点で、統語関係を明示するための形態手段であると言えよう。

現代チベット語を単純に能格型言語であると言えなくしている現象として、第 2 章

5) cf. 柴谷 [1986: 78]。

で見るように、本来絶対格で現れる自動詞の主語名詞が、GIS格助詞も取ることができるといふ現象がある。これは、動格型と呼ばれる言語を特徴付ける現象であるが、最近、自動詞の分裂という考え方が提出されている⁶⁾。すなわち、自動詞の主語が、動詞によって他動詞の行為者名詞の格形式と一致したり (S=A≠P)、被動者名詞と一致したり (S=P≠A) する。自動詞の分裂は、主語という統語関係の表出から、他動詞の能格現象に並行するような意味関係の表出への移行ではないかと思われる。長野 [1987b: 247] は、チベット語が動格型であると規定することを認めていないが、容易に否定できるものでもない。

チベット・ビルマ系諸言語においては、さまざまな能格的類型が観察されるが、その現れ方についても種々のパターンがある。能格を表す助詞が首尾一貫して現れることはなく、能格の分裂現象と呼ばれる。そのような分裂がいかなる原因によっているかが、チベット・ビルマ系諸言語の中で明らかになっているわけではない⁷⁾。

チベット語においても、他動詞の行為者に対する能格助詞 (GIS格助詞) の生起は、首尾一貫しているわけではなく、分裂現象を示している。次例は、za「食べる」という動詞について、行為者 nga「私」が、GIS格である場合 [(1a)] と絶対格である場合 [(1b)] である。

(1) a. ngas kha lag bzas pa yin/

私-GIS 食事 食べた AV

・私は食事をした

b. nga kha lag za gi yin/

私- ϕ ⁸⁾ 食事 食べる AV

・私は食事をする

チベット語の能格の分裂現象については、長野 [1987 b など] や DeLancey [1984a など] などの分析がある。分裂の原因について、長野は、チェイフ [1974] を基にした動詞の分類を提出して、動詞の意味に基づくとしている。長野が扱っている分裂現象は、他動詞全般について階層的に能格助詞の出現がスライドしていることを示すもので、本稿とは趣きが異なる。本稿では、基本的には GIS格助詞が現れるものを考察の対象とし、現れないものについては扱わない。ただし、自動詞では、GIS格助詞が現れ

6) cf. Merlan [1985].

7) cf. 長野 [1986: 119-120], 西田 [1989: 818-820].

8) 本稿の逐語訳における「 ϕ 」は、ゼロの助詞があるということを表しているのではなく、たんに、名詞が格助詞を持たない絶対格形式であることを表している。

ないものも対比的に示すことになる。したがって、他動詞と自動詞の一部を GIS 格助詞の分布に基づいて分類するものであって、動詞全般に及ぶものではない。

DeLancey は、能格の分裂について、*empathy hierarchy* などの名詞の意味的な階層性を用いて分析している。筆者は、DeLancey の分類を否定するものではないが、形式的な面からの記述が不十分であるところから、意味的・談話的な要因を参考程度にとどめ、GIS 格助詞の分布によって動詞を分類しようと思う。ただ、本稿は、動詞そのものに分裂現象の全面的な原因を求めるものではなく、分裂という現象を用いて動詞を分類した場合、分類された動詞が、それぞれどのような特徴を持つかを見てみようというものである。

第 1 章では、意志的な動作を表す他動詞の行為者が GIS 格助詞を取らない例をあげる。第 2 章では、自動詞の主語が GIS 格助詞を取りうる例と取りえない例を見る。第 3 章では、無意志的な動作・状態を表す動詞と、意味的形態的に対応する相対自動詞と相対他動詞とについて、それぞれ GIS 格助詞の分布を観察する。本稿では、基本的に 1 項動詞を自動詞、2 項動詞の内、行為者・経験者が GIS 格助詞を取るものを他動詞としている。文語チベット語はかなりはっきりと能格的であるため、1 項動詞を自動詞、2 項以上を取って行為者を GIS 格とする動詞を他動詞と言えるが、現代チベット語では、分裂現象のため、その区別が構造的に明らかとは言えない。

本稿の例文において、‘*’ は、それが付加された文は不適格であることを表し、‘?’ が付加された文は、不適格ではないものの適格性が低下していることを表す。また、‘/’ は、文末では文の区切りを表すが、文中に用いられている場合はその前後にある語句が交替することを表す。ただし、前後の語句のどちらかに ‘*’ が付加されている場合は、付加されていない語句を用いた例が適格な文になるのに対し、付加された語句を用いた例は不適格な文になることを表す。

1. 絶対格の行為者を取りうる他動詞：意志的他動詞

本章では、行為者名詞が絶対格化する他動詞を観察する。ここであげられる動詞

9) 本稿において、動詞の「(有) 意志性」と呼んでいるのは、*volitionality* の訳である。北村・長野 [1989: 782] は「意欲性」としている。*volitionality* は、Hopper and Thompson [1980: 252] によれば、“The effect on the patient is typically more apparent when the A (gent) is presented as acting purposefully;” (括弧内引用者註) ということであるが、本稿では、自動詞についても *volitionality* を考えるので、意図的な行為を表す動詞を意志動詞、意図的ではない状態・過程を表す動詞を無意志動詞と呼ぶことにする。意志動詞は、行為者によって制御可能である動作を表し、無意志動詞は、制御不可能である動作・状態を表す。この対立は ↗

の特徴は、意志的な動作を表している点にある⁹⁾。

1.1. 動作動詞の絶対格行為者

長野 [1987bなど] では、動作動詞のすべてが行為者として GIS 格名詞を取るとし、能格の分裂は人称やアスペクトに依らないとしている¹⁰⁾。しかし、他動詞の内、行為者名詞が絶対格で現れるものがある。特に、1人称の代名詞が未完了の動詞の行為者を表すとき顕著である。

- (2) a. nga kha lag za gi yin/
私- ϕ 食べ物 食べる AV
・私は食べ物を食べる
- b. ngas kha lag za gi yin/
私-GIS 食べ物 食べる AV
・私が食べ物を食べる

(2a) のように絶対格の行為者名詞が現れることが無標であって、b のように GIS 格の行為者名詞が現れると、対比や行為者の強調を表すという点で有標となる。

完了文では、普通、行為者名詞は絶対格にならない。次の諸例の a は、動詞が完了であり、絶対格の行為者を容認しない。

- (3) a. ngas/*nga stag gcig bsad pa yin/
私-GIS/私- ϕ 虎 一つ 殺した AV
・私は虎を殺した
- b. ngas/nga stag gcig gsod kyi yin/¹¹⁾
私-GIS/私- ϕ 虎 一つ 殺す AV
・私は虎を殺す

∨ 動詞自体の形態から判断されるものではない。意志動詞が無意志的な状態変化を表すことはよく見られる。まれには、無意志動詞が意志的な行為を表すこともある。星 [1988: 168] は、助動詞との基本的な結合の仕方によって、意志動詞・無意志動詞の対立を認めている。本稿では、「(無)意志的な用法」「(無)意志的な自動詞・他動詞」といった曖昧な用語を用いるが、それぞれの動詞の基本的な用法を言っているものと解釈されたい。

10) 「チベット語の能格助辞の生起は、近称遠称の別及びアスペクトには無関係であって、split は専ら動詞の意味によって条件づけられる」 [長野 1986: 127]。

11) ただし、この例で、行為者名詞が絶対格の場合、適格性が若干低下するようである。この類に含まれると考えられる動詞の中に、もう少しはっきりと行為者名詞が絶対格になることを嫌う動詞がある。そのような動詞が表す動作は、日常的に行われていないものであるように思われる。行為者名詞が必ず GIS 格で出現するのであれば、この種の動詞を第3章で見る動詞と区別する根拠が弱くなるように思われるが、実際には、第3章で見る動詞とは、助動詞によって区別されるものである。

- (4) a. ngas/*nga dbyin ji'i skad slob sbyong byas pa yin/
私-GIS/私-φ 英語 勉強 VBL AV
・私は英語を勉強した
- b. ngas/nga dbyin ji'i skad slob sbyong byed kyid yod/
私-GIS/私-φ 英語 勉強 VBL AV
・私は英語を勉強している
- (5) a. ngas/*nga zhal lta ma gcig btsal pa yin/
私-GIS/私-φ 女中 一 探した AV
・私は女中を一人探した
- b. ngas/nga zhal lta ma gcig 'tshol gyid yin/
私-GIS/私-φ 女中 一 探す AV
・私は女中を一人探す

しかし、各例の b では、未完了で絶対格の行為者を容認しており、実際には GIS 格の行為者名詞を用いるよりも無標である。

3 人称の行為者については、1 人称ほどではないが、絶対格になることがある。むしろ、次のような例において、GIS 格行為者を取ることも容認される。

- (6) sgrol ma/sgrol mas kha lag za gi red/
<人名>-φ/<人名>-GIS 食事 食べる AV
・ドルマが食事をする
- (7) skabs der bu mo de snam bu 'thag gi yod pas... ro sgrung¹²⁾ 9
時 それ-LA 女性 それ-φ 織物 織る AV NML-GIS
・そのときその女性は織物を織っていたので…
- (8) a. ma byan gyis/*φ kha lag bzos pa red/
コック GIS/φ 食事 作った AV
・コックが食事を作った
- b. ma byan gyis/?φ kha lag bzo gi red/
コック GIS/φ 食事 作る AV
・コックが食事を作る

12) 資料『尸語故事 (藏文)』を示す。

(8a) で見られるように、1人称の行為者の場合と同様、完了文では絶対格の行為者名詞は許されない。しかし、(8b) のように未完了の場合、絶対格の行為者は、容認度は下がるけれども、不適格になるわけではない。

次の(9)は、感覚を表す動詞の例である。「見る」「聞く」のような感覚を表す動詞では、行為者はGIS格助詞を取るのが普通である。しかし、次の例のように絶対格で表すこともできる。

(9) a. nga/?ngas deb 'di la lta gi yin/

私-φ/私-GIS 本 これ LA 見る AV

・私はこの本を見る

b. nga/ngas deb 'di lta gi yin/

私-φ/私-GIS 本 これ 見る AV

・私はこの本を読む

lta「見る」は、実際には「目を向ける」というような動作を表すものである。その場合、視線の方向を表すためには、(9a) のようにその対象にLA格助詞を付加する。bは、ltaが「読む(黙読する)」という意味を持ち、この場合は、deb 'di「この本」が絶対格で表される。(9a) では、GIS格形を用いた文の適格度が若干低下するが、行為者をGIS格によっても絶対格によっても表すことができる。

以上のことから、3人称の行為者においてはGIS格になる方が自然であるように思われるが、絶対格であっても許容されることがある。1人称の行為者はGIS格になるとかえって有標であり、絶対格で現れることを好む場合がある。本節で見たように、行為者名詞がGIS格であるか絶対格であるかという分裂現象の直接のきっかけは、動詞が完了か未完了かということに関わっている。しかし、ここで見た動詞は、このような分裂を許す動詞である。許さない動詞については、第3章で観察する。

1.2. 談話的な要因によるGIS格助詞の出現

本稿は、動詞が本来的にGIS格行為者を要求するかどうかによって動詞を分類しようとするものであるが、談話的に要求されたり、されなかったりするGIS格助詞があることも示しておく。特に、談話的な要因によってGIS格助詞が現れる場合は、むしろそれが有標であると考えられ、GIS格助詞が現れないことが無標である場合を予想させるからである。

(10)~(11)は、複数の行為者がいて、そのうちの一人だけが行為者として表に出

ている場合である。

- (10) a. rgyal pos zas brngos pa'i rdzag rdzog thu ba gang khyer yong nas
 王-GIS 食べ物 炒めた NML-GI 懐 一杯に 運んだ 来る NAS
 mo la byin/ khong rang yang bzas/ ro sgrung 14
 彼女 LA 与えた 彼 自身- ϕ も 食べた
 ・王は炒めた食べ物を懐いっぱい運んで来て、彼女に与え、彼自身も食べた
- b. khong rang gis yang bzas/
 彼 自身 GIS も 食べた
 ・彼自身も食べた
- (11) a. nga tsho'i nang nas bkra shis kyis kha lag bzas song/
 私 PL-GI 家 NAS <人名> GIS 食事 食べた AV
 ・私たちの家でタンが食事をした
- b. nga tsho'i nang nas bkra shis yang kha lag bzas song/
 私 PL-GI 家 NAS <人名>- ϕ も 食事 食べた AV
 ・私たちの家でタンも食事をした

(10a) は、b のように GIS 格助詞がある方が良いが、yang「も」によって絶対格が容認される。(11a) は「タンだけが、食事をした」ということであり、b は「タン以外の人も食事をした」というニュアンスを持つ。yang「も」によって、GIS 格助詞を省略することが許される。(10) (11) は談話的に GIS 格助詞が省略できる例である。

行為者に対比がある時には、GIS 格助詞が用いられる。対比という談話的に特別な意味を表すために GIS 格の行為者名詞が用いられるという点で、GIS 格助詞の使用が有標となる例であると言える。

- (12) ngas kyang dmigs pa dang sgrub pa rim la bya'o/
 私-GIS も 瞑想 DANG 三昧 順次 する
khyed kyis yang zhe rus rim la skyed cig/ ro sgrung 5
 おまえ GIS も 勇気 順次 生む IMP
 ・私も瞑想と三昧を順次行う。おまえも勇気を順次起こせ。

(13) ngad kyis sgor thub tshad bya'o/ ro sgrung 21

私 GIS 戸-LA できる限り する

・私ができる限り戸に何とかする

(12) も (13) も、文脈上「私」と「おまえ」に行為の対比がある。(13) は、「私が何とかしている間に、おまえは逃げろ」ということである。

語順を変更して OSV とした場合、行為者名詞に対して GIS 格助詞が使われる。使われない場合、発音が若干変化する¹³⁾。行為者が代名詞で表される場合、必ず、GIS 格助詞を取る。

(14) kha lag de bkra shis (kyis) bzos song/

食事 それ <人名> (GIS) 作った AV

・その食事はタシが作った

(15) stag 'di ngas bsad pa yin/

虎 これ 私-GIS 殺した AV

・この虎は私が殺した

例えば (14) では、「タシ」が新情報であって、その場合、GIS 格は、伝えるべき情報を担っているので、省略されにくく、GIS 格助詞が省略されているように見える場合も、意識の上で存在するため、「タシ」の発音に変化していると意識されるのだと思われる¹⁴⁾。

本節では、前節と同じ類の動詞の行為者名詞が、談話的な要因によって GIS 格助詞を省略する例と、必ず GIS 格助詞を取る例とを見た。しかし、すでに述べたように、これらは、談話的な要因によるものであって、ここで述べた類の動詞の固有の特質ではない。むしろ、このような有標の例から、GIS 格助詞が現れない文をより無標

13) この点については、共同研究会において、インフォーマントが「タシ」という名前の綴り bkra shis に引きずられ、語末の -s を GIS 格助詞の異形態と解釈しているのではないかと指摘を受けた。これは、インフォーマントも認め、例えば、「ソナム」という名前でも、その綴り bsod nams によって同様のことが生じる。これに対し、語末に -s を持たない「ドヂェ」rdo rje は、'toce というように語末を長くして、GIS 格助詞が付加されていることを明示する。ところが、ma byan 「コック」でも、GIS 格助詞なしで、強勢をもって発音されるので、必ずしも綴りに引きずられているとは言えない。このような発音の変化は、これまで報告されてこなかったように思われるので、今後調査が必要である。

14) 高橋 [1992] では、OSV 語順の時、SV の関係が密接化し、S が絶対格になるならば、antipassive 的であると考えていたが、やはり、それには無理がある。格助詞がない時には語順が格関係の指標となる以上、語順が変更された OSV において S が絶対格で現れるのは不自然である。この語順は、日本語の「X ハ Y が〜スル」にあたると思われる。

であると考えてよい。

1.3. まとめ

本章で見た動詞は、談話的な要因によって GIS 格と絶対格のどちらかが好まれることがあるが、それを考慮に入れなくても、行為者が絶対格で表されうるものである。このような動詞は、有意志的な動作・行為を表す動詞であり、長野 [1987b] の a 類の動詞の一部にあたる。これには、過程の意味が含まれることがあるが、行為者が絶対格であるときは、動作のみを表していると考えられる。つまり、動詞が表す動作に伴う被動者の状態変化が、表面的には表現されない、または、変化の結果を含意しないということである。

2. 自動詞の主語：動作主格，対象主格

自動詞の主語は原則として絶対格で表される。しかし、自動詞の中にも、GIS 格名詞で行為者を表せるものと、絶対格名詞しか用いられないものがある。

第1章で見たように、他動詞に対して行為者を表す GIS 格助詞が現れないことがある。その場合、被動者名詞も現れなければ、格形式の点から他動詞と自動詞との区別はつかない。さらに、本章で見るように、自動詞の主語が GIS 格助詞を取る場合、他動詞構文で被動者名詞がない場合と同じ構造になるので、動詞の自他を区別することができない。しかし、これは、自動詞と他動詞に区別がないということではない。基本的には、自動詞は1項動詞であり、必須項が1つに限られている。本章は、自動詞の必須項が、実は二種あることを示す。

2.1. GIS 格の主語を許す自動詞

長野 [1987b: 246] では、「チベット語の場合、『行く』『来る』といった往来動詞に限って、-kyis¹⁵⁾ が出現することがある」としているが、行為者を GIS 格で表せるものは往来動詞に限らない。

まず、行為者を GIS 格名詞で表すことのできる動詞を見る。このような動詞は、意志的な動作を表すものである。特に、完了文の行為者は、GIS 格助詞を取ることが不自然とは言えない。

15) -kyis は GIS 格助詞の異形態。長野 [1987b] は、これを代表形としている。

- (16) nga/ngas kyo'oto la bsdad pa yin/
私-φ/私-GIS 京都 LA 住んだ AV
・私は京都に住んだ
- (17) a. bkra shis (kyis) deb nyo ga deb tshong khang la phyin song/
<人名> (GIS) 本 買う CONJ 本屋 LA 行った AV
・タンは本を買いに本屋に行った
- b. bkra shis φ/*kyis deb nyo ga deb tshong khang la 'gro gi red/
<人名> φ/GIS 本 買う CONJ 本屋 LA 行く AV
・タンは本を買いに本屋に行く
- (18) bkra shis kyis/φ sa'i sgang nas lang song/
<人名> GIS/φ 土-GI 上 NAS 起きる AV
・タンは地面から起きあがった
- (19) bsod nams kyis/φ shing sdong 'og la nyal song/
<人名> GIS/φ 木 下 LA 寝る AV
・ソナムは木の下に寝た

動詞が完了を表している場合、未完了である時より他動性が高いとされる¹⁶⁾が、自動詞について見れば、それは、動作性が高くなっていると言い換えられるように思われる。もともと動作性のある自動詞が完了した動作を表す時、その行為者名詞は GIS 格助詞を取りやすいと言える¹⁷⁾。

「(他の人ではなく) 私が～する」のように、行為者に対比があれば、未完了でも GIS 格名詞になることがある。(21) は、文脈上、特に他の行為者と対比があるというものではないが、「その少年」と「泣く」という行為の結び付きが強調されている。

- (20) ngas lha sar 'gro gi yin/
私-GIS ラサ-LA 行く AV
・(他に行く人がなければ) 私がラサへ行く

16) cf. Hopper and Thompson [1980: 252].

17) Chang & Chang [1980: 22ff.] は、多くの例をあげ、'...with intransitive verbs the ergative is used to signify either the achievement or the guarantee of an act directed toward a goal.' [CHANG & CHANG 1980: 21] と解釈し、'goal-directed activity' [CHANG & CHANG 1980: 19] と呼んでいる。

- (21) bu chung des ngus yong/ ro sgrung 17
少年 小さい それ-GIS 泣く AV
・その少年が泣く

上の2例は有標であるという点で、(16)～(19)の例とは異なっており、GIS格助詞の出現は談話上の要因に左右されていると言える。しかし、(16)～(21)の例によって、動作性のある自動詞の主語名詞が、GIS格助詞を取りうるということが明らかである。このようなGIS格助詞を取りうる自動詞の主語を「動作主格」と呼ぶことにする。

2.2. GIS格の主語を許さない自動詞

2.1節の動詞に対し、自動詞の中で、主語名詞をGIS格にできないものは、以下に見るように、主語名詞の状態や状態変化(過程)を表すものである。状態変化とは、ある状態の主体が別の状態に変化することを表すということである¹⁸⁾。例えば、(22)は生から死への変化を表す。ここで扱う自動詞は、そのような状態変化を引き起こす行為者を取ることはなく、変化主体のみを項として取る動詞である。

(22) (24)は主体の状態変化を表し、(23)は状態を表している。

- (22) nga/*ngas shi gi red/
私-φ/私-GIS 死ぬ AV
・私は死ぬ¹⁹⁾
- (23) nga/*ngas na gi red/
私-φ/私-GIS 病気である AV
・私は病気になる
- (24) nga/*ngas cham pa brgyab song/
私-φ/私-GIS 風邪 VBL AV
・私は風邪をひいた

18) cf. チェイフ [1974: 100-104]。

19) 星 [1988: 195] は、

(n1) ngas shi gi yin/
私-GIS 死ぬ AV
・私が死んでやる

とすることができるが、このような用法は語用論的な要因が強すぎ、一般的には許されないので、ここでは考察の対象としない。

以上のような自動詞において、主語は必ず絶対格であり、GIS 格助詞を取らない。また、談話的な要因によっても、GIS 格名詞とならない。これは、他動詞に対する被動者の格形式と同じである。したがって、この種の主語を持つ自動詞を2.1節で見た自動詞と区別して、別の類を立てることができると考えられる。

このような動詞の中でも、感情を表す動詞においては、行為性を高めることによって行為者名詞が GIS 格助詞を取ることがある²⁰⁾。

- (25) a. bsod nams bde skyid la dga' po 'dug/
 <人名>-φ <人名> LA 好きだ AV
 ・ソナムはデキーが好きだ
- b. bsod nams kyis bde skyid la dga' po byed kyi 'dug/
 <人名> GIS <人名> LA 好きだ VBL AV
 ・ソナムはデキーに好意を示している
- (26) a. nga/?ngas bde skyid la dga' po byed kyi yin/
 私-φ/私-GIS <人名> LA 好きだ VBL AV
 ・私はデキーに好意を示す
- b. nga/ngas bde skyid la dga' po byed kyi yod/
 私-φ/私-GIS <人名> LA 好きだ VBL AV
 ・私はデキーに好意を示している

(26a) では、行為者が GIS 格助詞を取ると適格性が低下するのに対し、b では、GIS 格助詞を取ることが容認される。これは、b では、実際の行為内容を意識しているからではないかと考えられる。

(25a, b) におけるような構文の違いは、動詞化詞 byed を使用したことによるものであって、dga' po「好きだ」自体を GIS 格名詞を取る動詞であるように分類することはできない。

本節で見たような、絶対格でしか現れない自動詞の主語を「対象主格」²¹⁾と呼ぶ。

20) 感情を表す動詞が絶対自動詞であると言えるかどうかには、感情の対象を取るという点で疑問が残る。LA 格助詞は、動作の及ぶ方向や物の移動の到達点を表す助詞であり、授受動詞では与格を表すものであって、対格助詞 objective ではない。感情の主体を絶対格で、感情の対象を LA 格で表す構文をチベット語の他動詞構文の特殊な場合（例えば、antiergative）と見ることが可能かもしれないが、現時点で、筆者はこの見方を採らない。LA 格助詞の用法については、高橋 [1989] を参照されたい。

21) 上の「動作主格」とともに田窪 [1987: 38] の用語である。

2.3. まとめ

自動詞の主語が GIS 格助詞を取ることが可能な場合は、以下の条件による。

①動詞が意志的な行為を表していること

(1人称では、gi yin 系の助動詞を用いることができる²²⁾)

② a) 完了文であること

b) ただし、未完了であっても、主語に対比や意志の強調がある場合

上に述べたように GIS 格助詞を取りうる自動詞の主語を動作主格、絶対格でしか現れない主語を対象主格と呼ぶことができると思われる。本来絶対格形で現れていた自動詞の主語が、動詞の表す動作性によって二つに分裂している。これによって、動詞自体に、たんに自動詞として一つにまとめられない二つの類があると考えてよい。この2種の自動詞は別々の文構造を要求すると考えられるが、それぞれの自動詞が要求する二つの主格が、田窪 [1987] が論じている日本語と同様に、統語上異なった階層に属しているかどうかを考察することは、今後の課題としたい。

3. 行為者（または経験者）名詞が必ず GIS 格助詞を取る動詞

本章で見る動詞は、必須項として行為者名詞・経験者名詞を取るものであるが、ともに GIS 格助詞を取って出現する。第1章で見た動詞は、行為者が絶対格で現れることがありうる動詞であったが、ここで見る動詞は、行為者・経験者が絶対格で現れるために談話的な要因が必要である。

3.1. 無意志的他動詞

無意志的な他動詞は、知覚を表すものと無意志的な動作・行為を表すものがある。ともに、次節で見る相対動詞と異なり、対応する自動詞がないという点で絶対他動詞²³⁾と言える。

知覚動詞は、知覚の主体が行為者ではなく経験者であり、それが GIS 格で現れる。また、知覚の対象は絶対格である。

22) cf. Chang & Chang [1980: 17].

23) 第1章、第2章で見た動詞は、意味的形態的に対応するような自動詞・他動詞を持たない。それに対し、本章の次節で見る動詞は、自動詞と他動詞が意味的形態的に対応している。寺村 [1982: 305] は、前者を絶対他動詞、絶対自動詞とし、後者を相対他動詞、相対自動詞として区別している。

- (27) ngas/*nga sgrung de shes kyi yod/
私-GIS/私- ϕ 物語 それ 知る AV
・私はその物語を知っている
- (28) ngas/*nga sgrung de brjed kyi red/
私-GIS/私- ϕ 物語 それ 忘れる AV
・私はその物語を忘れる
- (29) am chis sman de shes kyi yod pa red/
医師-GIS 薬 それ 知る AV
・医師はその薬を知っている
- (30) sngags pa rnams kiyis/* ϕ tshor te ro sgrung 21
呪術者 PL GIS/ ϕ 気がつく CONJ
・呪術者たちは気がついて
- (31) khyed rang gis dran gso ma byas na
あなた GIS 想起 NEG VBL CONJ
ngas/*nga 'dzin grwa'i nang la sba khug lus kyi red/
私-GIS/私- ϕ 教室-GI 中 LA 財布 忘れる AV
・あなたが思い出させなければ私は教室に財布を忘れる

第1章で見た動詞では、文脈に関わりなく、未完了においてその行為者が絶対格になることが容認されたが、知覚動詞では必ず GIS 格助詞を取る。無意志的な動詞には、1人称の経験者に対して *gi yin* 系の助動詞が用いられない。3人称の *gi red* 系の助動詞が用いられるわけであるが、それは、ここで観察している動詞が知覚の対象を主語とし、GIS 格名詞を道具的な項とする自動詞であることを示すものではない。行為・状態に対する1人称による制御が不可能であることを表しているだけである。知覚動詞では、現在の状態について述べる場合、*gi yod* 系の助動詞が用いられることから、助動詞の選択において経験者名詞（GIS 格）が関与していることは間違いない。助動詞の選択条件を確定することは困難であるが、選択に関与する GIS 格名詞を必須項と考えるなら、知覚動詞が自動詞とは言えない²⁴。

次の例からは、知覚動詞において、動詞の完了性に関わらず、知覚・感覚の主体が GIS 格名詞で現れることがわかる。

(32) sngags pa rnam kyis/* ϕ bu mo tshor pa red/

呪術者 PL GIS/ ϕ 女性 気がつく AV

・呪術者たちは女性に気がついた

(33) a. tshong pa des/*de du ba mang po mthong bzhag/

商人 それ-GIS/それ- ϕ 煙 多い 見える AV

・その商人は煙をたくさん見た

b. tshong pa des/*de du ba mang po mthong gi red/

商人 それ-GIS/それ- ϕ 煙 多い 見える AV

・その商人は煙をたくさん見る

「見る／見える」「聞く／聞こえる」などの感覚を表す動詞は、感覚の主体である経験者名詞が GIS 格助詞を取る。ただし、1.1 節の例 (9) で見たように「見る」「聞く」は意志動詞であって、本章の対象とならない。「見る」「聞く」とは異なり、「見える」「聞こえる」の場合、見ようとして見るのではなく、無意識的に目にはいるということを表している。すなわち、mthong「見える」は動作を表すものではない。Ita「見る」が動作を表すことができるのに対し、mthong は感覚のみを表しており、このような動詞では、経験者名詞は必ず GIS 格助詞を取る。

(34) は、後続する文で GIS 格助詞が省略される例である。a では、「それとタンを知っている」という解釈より、「タンもそれを知っている」と解釈する方が自然なので、GIS 格助詞は不要である。b では、二つの解釈が可能であるが、②の解釈を取る場合は、bkra shis「タン」も経験者となるから GIS 格助詞を取った方が良い。

(34) a. bsod nams kyis de shes kyi 'dug/ bkra shis yang shes kyi 'dug/

<人名> GIS それ 知る AV <人名>- ϕ も 知る AV

・ソナムはそれを知っている。タンも知っている。

b. bsod nams kyis khong shes kyi 'dug/ bkra shis yang shes kyi 'dug/

<人名> GIS 彼 知る AV <人名>- ϕ も 知る AV

・ソナムは彼を知っている。タンも知っている。

①ソナムは、彼とタンを知っている

②彼を、ソナムとタンが知っている

24) Chang & Chang [1980: 29] は、mthong「見える」や go「聞こえる」を制御不可能な自動詞と同様に扱っている。しかし、その場合、GIS 格助詞に関する説明は容易になるが、完了文の時、1 人称の経験者が GIS 格助詞を取るにも関わらず、助動詞として byung を取ることにしている説明はできない。mthong や go の特異性は、この点にある。

(34)に見られるように、知覚動詞についても GIS 格助詞を省略することがある。しかし、第1章で見た動詞との違いは、後者が、文脈上の条件がなくても省略しうるのに対して、前者の知覚動詞では、そのような条件がなければ省略しにくい点にある。無意志的な他動詞も、行為者を絶対格にすることはない²⁵⁾。

- (35) ngas/*nga bod skad shod stangs nor pa
私-GIS/私-φ チベット語 話し方 間違う NML
de tsho nor bus yo bsrang byed kyi red/ 『読本』²⁶⁾ p. 185
それ PL <人名>-GIS 訂正 VBL AV
・私がチベット語の話し方を間違ったら、ノルブがそれらを訂正する

- (36) khong gis rgya skad shod stangs nor pa
彼 GIS 中国語 話し方 間違う NML
de tsho ngas lam sang yo bsrang byed kyi yod/ 『読本』 p. 185
それ PL 私-GIS すぐに 訂正 VBL AV
・彼が中国語の話し方を間違えたら、すぐに私がそれらを訂正する

- (37) ngas/*nga khyed rang gi sba khug brlag gi red/
私-GIS/私-φ あなた GI 財布 なくす AV
・私は(あなたの財布を持っていたら)あなたの財布をなくすだろう

(37)は、「私は、うっかりとあなたの財布をなくしてしまうだろう」という意味である。

無意志的な用法での絶対他動詞には、意志性を GIS 格助詞の出現に結び付ける要因がもともと欠けているから、GIS 格が意志性と関連しているとは言い難い。

3.2. 相対動詞

相対動詞とは、形態的意味的に対応する他動詞と自動詞のことである²⁷⁾。例えば、

25) 'byor「受ける」のように経験の主体が受け手である場合、GIS 格ではなく LA 格を取ることがあるが、本稿では考察の対象としない。

(n1) bkra shis la yi ge 'byor pa red/
<人名> LA 手紙 受ける AVI
・タンは手紙を受け取った

26) 資料『拉薩口語読本』を示す。

27) 金鵬 [1958] では「自動：使動」という対立を持つ動詞として記述されている。本稿では、このような対立がない動詞を絶対動詞と呼んでいるので、「相対動詞」という用語を用いる。

'khor「回る」と skor「回す」のような動詞であり、日本語でも同様の対応をなしていることが多い。相対自動詞の主語は、対応する相対他動詞の被動者にあたり、動詞が表す過程（状態変化）の変化主体である。相対他動詞の行為者は、その変化を引き起こす主体である。

相対自動詞では、無意志的な動作を表す他動詞的な用法がある。この場合、行為者名詞は必ず GIS 格助詞を取る。

(38) ngas shog bu 'di ral song/ cf. Goldstein & Nornang [1984: 120]

私-GIS 紙 これ 破れる AV

・私がこの紙を破ってしまった

(39) ngas deb ral song/ [武内 1978: 70]²⁸⁾

私-GIS 本 破れる AV

・私は本を破ってしまった

(40) ngas sgo bye bzhaḡ/ [武内 1978: 71]

私-GIS 戸 開く AV

・私は戸を開けてしまった

実際には、ツルティム氏は (38)～(40) の例を容認しない。Goldstein & Nornang [1984: 118] は 'involuntary-causative' と呼んでおり、自動詞であるとは記述されていないが、これは、状態変化を表す無意志的な自動詞である。したがって、(38)～(40) における行為者は道具的であり、必須項ではないことから、意味を明確にするために助詞を取らざるをえないと言える²⁹⁾。相対自動詞の他動詞的な用法は、他動詞として用いられているのではなく、自動詞として道具的な行為者を取っていると考える。

相対自動詞において、その主語は GIS 格になれない。

(41) a. nga 'khor song/

私- \emptyset 回る AV

28) 武内 [1978] では音韻表記であるが、文語の綴りに改めた。

29) Goldstein & Nornang [1984: 118] には、'The pattern is formed by placing the subject in the instrumental case...' とあるが、Goldstein & Nornang [1984: 62] に、'Active past constructions generally require the subject to be in the instrumental case.' とあるので、彼らは、本稿で GIS 格と言っているものを 'instrumental case' と言っているだけで、「道具的な主語」を意味しているわけではない。

- ・私は（無意識的に）回る
- b. *ngas 'khor song/pa yin/
私-GIS 回る AV/AV

これは、2.2節で見た無意志的な絶対自動詞と同じである。GIS格名詞の分布をもとに動詞を分類するという本稿の目的からすれば、両者を区別する根拠は欠けているが、その主語の性格が異なっていると考えられるので、ここでは両者を区別する³⁰⁾。

相対他動詞について見ると、行為者はGIS格で表され、絶対格名詞は被動者であると解釈される。

- (42) a. nga skor gyi yin/
私-φ 回す AV
・（私が）私を回す
- b. ngas skor gyi yin/
私-GIS 回す AV
・私が（何かを）回す
- (43) a. nga bskor pa yin/(or song/)
私-φ 回した AV
・（私が）私を回した
- b. ngas bskor pa yin/
私-GIS 回した AV
・私が（何かを）回した

(42a)は、助動詞がgyi yinであることによって、行為者が第1人称であることが明らかである。したがって、絶対格で現れているnga「私」を行為者であると解釈することが可能なはずである。しかしながら、GIS格助詞を取っていないことによって被動者である回される対象として解釈される。bでは、ngaがGIS格形になっているので、「回す」という行為が「私」によって行われていることになるが、回す対象は明示されていない。助動詞から見て、行為者が1人称であることは明らかなので、ngas「私によって」を絶対格にしてもよさそうなものだが、それでは、aのように行為者

30) 主語の性格を考慮に入れる場合、この両者の動詞を構造的に区別する根拠の一つとして、名詞化接辞 mkhan「～する人」による動詞の名詞化がある。しかし、mkhanの用法については今後詳細な記述が必要である。動詞の形態面から言えば、対応する動詞があるかどうかという点で区別できる。

が明示されていないと解釈される。(43)は、その過去形である。(43a)については、助動詞が *pa yin* であれば、自分自身で回したのであり、*song* であれば、誰か別の人が回したことになる。

目的語が明示されている場合には、絶対格になってもよいが、好まれない。

- (44) a. nga chu/* ϕ skol gyi yin/
私- ϕ 水/ ϕ 沸かす AV
・私は水を沸かす
- b. ngas chu/ ϕ skol gyi yin/
私-GIS 水/ ϕ 沸かす AV
・(同上)
- (45) a. nga shing sdong/* ϕ gcod kyi yin/
私- ϕ 木/ ϕ 切る AV
・私は木を切る
- b. ngas shing sdong/ ϕ gcod kyi yin/
私-GIS 木/ ϕ 切る AV
・(同上)
- (46) a. nga shog bu/* ϕ dbral gyi yin/
私- ϕ 紙/ ϕ 破る AV
・私は紙を破る
- b. ngas shog bu/ ϕ dbral gyi yin/
私-GIS 紙/ ϕ 破る AV
・(同上)

相対他動詞は、有意志的な動詞として用いられるものであり、その点では、第1章で見た動詞と同じである。(44)~(46)に見られるように、1人称現在において絶対格行為者が生じうるが、実際には、好ましい形式ではない。被動者が無い時にも、絶対格の行為者名詞は容認されない。このことから、意志性のある他動詞については、絶対他動詞と相対他動詞で差異があることがわかる。すなわち、GIS格助詞の生起は、動詞が表す動作の意志性には関係がない。相対他動詞は、行為のみではなく、対応する相対自動詞が表している過程(状態変化)を含んでおり、したがって、その変化主体を常に含意していると考えられる。

GIS 格名詞の分布という観点から見ると、相対他動詞は無意志的な絶対他動詞と類似している。本稿での観察では、相対他動詞が文脈なしで絶対格の行為者を許す可能性があるという点でのみ異なっている。GIS 格名詞の分布が若干異なっている点、区別の強い根拠となるかどうかは、まだ検討を必要とするように思われる。したがって、これらの動詞を区別する主たる根拠は、GIS 格名詞の分布ではなく、結び付く助動詞によっている³¹⁾。

相対動詞の観察によってわかることは、状態変化という過程における変化の主体を「期待している」動詞では、その変化をもたらす行為主体を GIS 格で表さなければならぬということである。

本章で見た動詞の内、相対自動詞を除く2種の他動詞は、ともに、被動者にあたる名詞句を動詞自体が期待していると考えられる。第1章で見た動詞が被動者に注目せず、動作のみを表す用法において行為者を絶対格形にしていると考えられるのに対し、本章で見た2種の他動詞は、被動者の存在を前提とする状態・過程を表していることにより、それを引き起こす行為者名詞は GIS 格にならざるをえない。

4. 結 論

本稿での観察から、チベット語の他動詞は、行為者名詞が GIS 格でなければならない動詞、絶対格で現れてもよい動詞、自動詞であれば、絶対格でなければならない動詞、GIS 格で現れてもよい動詞に分類できる。

これを、自動・他動に絶対的・相対的という基準を加えて整理すると表1を作ることができる。

絶対他動詞の意志的な用法においては、動作のみを表し、被動者 patient が期待されていないことがあると考えられ、その場合、絶対格の行為者を取り、それに対して、無意志的な絶対他動詞と相対他動詞は、被動者にあたる項がなければ、動詞が表す動作・状態(変化)などが成り立たないものと考えられる。他動詞は、被動者を期待しているかどうかによって分裂が生じると言える。

自動詞について見ると、意志的な用法がある自動詞と無意志的な用法がある自動詞との間に分裂が生じている。第2章で述べたように、絶対自動詞においては、意志的な主語を「動作主格」、無意志的な主語を「対象主格」と区別できる。相対自動詞の

31) すなわち、無意志的な絶対他動詞には、gi yin 系の助動詞が用いられないのに対し、相対他動詞には用いられる。

表 1

		A	P
絶対他動詞	意志的	GIS [~ABS]	ABS
	無意志的	GIS	ABS
相対他動詞	意志的	GIS	ABS
絶対自動詞	意志的	[GIS~] ABS	
	無意志的		ABS
相対自動詞	無意志的		ABS

([]内は、その方が無標である場合がある格形。)

主語は「対象主格」であると言えよう。3.2節で述べたように、格形式においては、無意志的な絶対自動詞と相対自動詞とを区別する根拠はないが、これらの動詞は区別しておくことが有用であると考ええる。

おわりに

最後に、動詞の完了性を基準にして、GIS 格助詞の分布を表にすると、次のようになる(表2)。他動詞については行為者・経験者の格形式であり、自動詞については主語の格形式である。

この表から、行為者は、未完了の時に対格型になりやすく(行為者も被動者も絶対格なので、中立型と言うべきであるが、ここでは措く)、完了の時には動格型 active type になりやすい(意志的自動詞の主語が能格形になりやすい)と言える。この点

表 2

		impf	pf
有意志的用法	絶対自動詞	ABS	ABS~GIS
	絶対他動詞	ABS~GIS	GIS
	相対他動詞	GIS	GIS
無意志的用法	絶対他動詞	GIS	GIS
	絶対自動詞	ABS	ABS
	相対自動詞	ABS	ABS

で、チベット語が能格言語であると言うことは正確な陳述ではない³²⁾。

本稿で、筆者は、GIS 格名詞の分布に基づく動詞の分類を試みた。この分類の基準としての GIS 格名詞の分布は、少なくとも名詞の形態上、チベット語が能格的であることを表している。他動詞の行為者を絶対格で表す動詞と言っても、実際に顕著に現れるのは 1 人称現在（未完了）の場合のみであり、その点では、DeLancey の示している行為者名詞の意味的な階層性による分類が整然としているように見える。しかし、上で見てきたように、能格の分裂現象が起こりやすい動詞は限られており、それによって分類された動詞自体が意味的特徴を共有している点は注目する価値がある。特に、意志性 *volitionality* を基本に考えると、無意志動詞に対する GIS 格名詞の分布は、説明が困難となる。すなわち、意志性が低いにもかかわらず、きわめて能格的な分布を示しているのである。

このように分類された動詞が、それぞれ、構文上異なった特徴を示すであろうことは、十分期待される。本稿で考察した動詞の分類は、チベット語の構文論的特徴を考察する上できわめて重要となろう。

文 献

CHANG, Betty Shefts & Kun CHANG

1980 Ergativity in Spoken Tibetan. *Bulletin of Institute of History and Philology* 51: 15–32.
チェイフ, W. L.

1974 『意味と言語構造』青木晴夫訳 東京：大修館書店。

DELANCEY, Scott Cameron

1982 Aspect, Transitivity and Viewpoint. In P. J. Hopper (ed.), *Tense-Aspect: Between Semantics and Pragmatics*, Amsterdam: John Benjamin, pp. 167–183.

1984a Transitivity and Ergativity Case in Lhasa Tibetan. *BLS* 10: 131–140.

1984b Notes on Agentivity and Causation. *Studies in Language* 8: 181–213.

1985a Lhasa Tibetan Evidentials and the Semantics of Causation. *BLS* 11: 65–72.

1985b On Active Typology and the Nature of Agentivity. In Frans Plank (ed.), *Relational Typology*, Amsterdam: Mouton, pp. 47–60.

1986 Evidentiality and Volitionality in Tibetan. In Wallace Chafe and Johanna Nichols (eds.), *Evidentiality: The Coding of Epistemology*, New Jersey: Ablex Publishing Corporation, pp. 203–213.

格桑居冕

1982 「藏語動詞の使動範疇」『民族語文』(5): 27–39。

GIVÓN, Talmy

1984 *Syntax. A Functional-Typological Introduction*, Vol. I. Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

GOLDSTEIN, Melvyn C. & Nawang NORANG

32) 分裂という現象から言えば、動詞が完了である時、自動詞が分裂する傾向にあり、未完了の時、他動詞が分裂する傾向にあると言う方が実状に近いように思われる。

- 1984(1970) *Modern Spoken Tibetan: Lhasa Dialect*. Bibliotheca Himalayica, Series II, Vol. 14, Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- HOPPER, Paul J. and Sandra A. THOMPSON
1980 Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56: 251-299.
- 星 泉
1991 「現代チベット語の「主語」をめぐって」(チベット・ビルマ系諸民族の言語文化研究会 [1991/12/16] における発表資料)。
- 星実千代 (編)
1988 『現代チベット語文法 (ラサ方言)』東京: ユネスコ東アジア文化研究センター。
- 胡 坦
1984 「ラ薩藏語中幾種動詞句式的分析」『民族語文』(1): 1-16。
- 金 鵬
1958 『藏語拉薩日喀則昌都話的比較研究』北京: 科学出版社。
1979 「論藏語拉薩口語動詞的特点与語法結構的關係」『民族語文』(3): 173-181。
1983 『中国少数民族語言簡志叢書 藏語簡志』北京: 民族出版社。
- 北村 甫・長野泰彦
1989 「チベット語 (現代口語)」亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』第2巻 (世界言語編 (中)) 東京: 三省堂, pp. 766-783。
- 松本克己
1986 「能格性に関する若干の普遍特性」『言語研究』90: 169-190。
- MERLAN, Francesca
1985 Split Intransitivity: Functional Oppositions in Intransitive Inflection. In J. Nichols and A. C. Woodbury (eds.), *Grammar Inside and Outside the Clause, Some Approaches to Theory from the Field*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 324-362.
- 長野泰彦
1985 「チベット語の能格助詞と動詞の意味」『日本西藏学会々報』31: 1-5。
1986 「チベット・ビルマ系諸語における能格現象をめぐって」『言語研究』90: 119-148。
1987a 「ネワール語の能格現象」『国立民族学博物館研究報告』11(4): 811-835。
1987b 「現代チベット語の文法的特徴」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』北村 甫教授退官記念論文集 東京: 冬樹社, pp. 204-247。
- 西田龍雄
1989 「チベット・ビルマ語派」亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』第2巻 (世界言語編 (中)) 東京: 三省堂, pp. 791-822。
- 柴谷方良
1986 「能格性をめぐる諸問題」『言語研究』90: 75-96。
- 高橋慶治
1989 「現代チベット語における格助詞の意味機能について—LA 格助詞を中心に—」修士論文 京都: 京都大学。
1992 「現代チベット語における能格性についての再考察にむけて」1991年度博士後期課程研究報告 京都大学大学院。
- 武内紹人
1978 「現代チベット語における文の構造」修士論文 京都: 京都大学。
1990 「チベット語の述部における助動詞の機能とその発達過程」崎山 理・佐藤昭裕編集代表『アジアの諸言語と一般言語学』西田龍雄教授還暦記念論文集 東京: 三省堂, pp. 6-16。
- 田窪行則
1987 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6(5): 37-48。
- 寺村秀夫
1982 『日本語のシンタクスと意味』第I巻 東京: くろしお出版。
- 譚 克 讓
1988 「藏語動詞の自動態と使動態」『民族語文』(6): 42-50。
- 謝 広 華
1982 「藏語動詞語法範疇」『民族語文』(4): 35-47。

資 料

胡坦，索南卓噶，羅秉芬

1989 『拉薩口語讀本』北京：民族出版社。

北村 甫

1962 「チベット語ラサ方言テキスト：/[^]drum/sgrung (1)」『二松学舎大学論集』昭和37年度，pp. 1-16。

『尸語故事（藏文）』*ro sgrung* 拉薩：西藏人民出版社，1980。